

平成29年度特別展

白山開山1300年記念

泰澄 — 白山信仰における意義を探る —

福井・石川・岐阜の3県にまたがる白山。ひととき高く、厳かなそのすがたから神そのものとして、あるいは神々の住まう地として崇められてきました。その神の山・白山にはじめて足を踏み入れ、修行の地として開いたとされるのが「僧・泰澄」です。泰澄が登頂し、そこに住まう神々と対面したとされる養老元年(717)から今年丁度1300年。この節目の年を記念して、改めて泰澄の事蹟とその意義について考えてみます。

ここでは、展覧会の流れにしたがい、みていきましょう。

序章 うたと物語にみえる「白山」

まず、うたと物語から白山についてご紹介します。白山の名がみえる古いものは、平安時代の法律書「延喜式」の「神名帳」に記載されています。以降、白山は神としてあるいは神の住まう処と、都の人々にも広く知られていたことは、和歌や枕草子のような随筆等に登場することからわかります。展示では和歌の世界で最も尊ばれる「古今和歌集」(当館蔵)の写本を御覧いただきます。ここで特筆すべきは平安中期の時点で、「雪」と「白山」は一对であるように記されること、「観音」の霊場と意識されていたことがあげられます。このように信仰の山として知られた白山ですが、やがて時代が大きく変化する室町末期から江戸初期には一般庶民も登るようになり、やがて信仰とレクリエーションを兼ねて向かうようになります。このような人々の白山への認識を追います。

第一章 『泰澄和尚伝記』の世界



重文 泰澄および二行者坐像 (大谷寺旧蔵 文化庁蔵)

泰澄の誕生から没年まで編年体で克明に記述されている書物が『泰澄和尚伝記』です。この伝記によると泰澄は、天武11年(682)、現在の福井市浅水町で生まれ、持統9年(695)頃から越知山に入り修行をはじめ、やがて白山神の導きにより養老元年、九頭竜川畔から伊野(現勝山市猪野)を経て白山頂へと赴きました。以後白山中にて修行の日々を過ごしたようですが、その高い験力により養老6年(722)、元正天皇の病氣平癒のため奈良の都へと向かいました。死期の近づいた泰澄は、白山での日々を終え、天平宝字2年(758)、若い頃修行に励んだ越知山に再び戻り、ここで最後の時を迎えました。以上のような生涯のエピソードに、年紀と彼の年齢が付き、さらに天皇や道昭、行基、玄昉など奈良時代の豪華キャストがきら星のごとく次々と登場し、同時代の公式史書である『続日本紀』と齟齬がない点も一層真実味を増して読者にインパクトを与える小さな大河ドラマといえるでしょう。このコーナーでは越知神社本『泰澄和尚伝記』全編をご覧いただき、泰澄の生涯をみていきます。泰澄の肖像として最もよく知られる泰澄および二行者坐像(文化庁蔵(大谷寺旧蔵))をご覧いただきます。今回は特に、華やかな彩色の残る像の背面も含め、本像の魅力に触れていただきたいと思います。さらに幼少の泰澄



白山垂迹曼荼羅図(愛知県神光寺蔵)

澄をただならぬ人物と見抜いた道昭坐像(奈良県元興寺蔵)、白山の神々と泰澄の出会いを描いた白山曼荼羅図(愛知県神光寺蔵)、白山の本地仏を細かい彫刻で表した出色の懸仏(奈良国立博物館蔵)も登場します。さらに白山上で泰澄と語り合った奈良時代仏教僧の巨星・行基菩薩画像(大阪府堺市博物館蔵)など、『泰澄和尚伝記』で描かれるエピソードを関連資料によりご覧いただきます。

第二章 はじまりの山；越知山と開祖・「泰澄」

『泰澄和尚伝記』を通読すると、白山と越知山での活動に特化していることに気がきます。また、あとがき部分では大谷寺僧「神興」という人物が筆記した旨が記されており、越知山・大谷寺が本書の成立に深く関わっていることがわかります。このコーナーでは『泰澄和尚伝記』と縁の深い越知山大谷寺を取り上げます。

まず、信仰の山としての越知山のすがたを描いた「越知山絵図」や、山内の諸堂宇やそこに祀られる神仏の詳細を記述した『越知山大谷寺諸堂社神体覚』等により越知山のすべてをご紹介します。さらに、不動明王立像(文化庁蔵 重要文化財)や、初公開となる泰澄坐像(越知神社蔵)も登場し、明治期の廃仏毀釈以前の越知山へいざないます。加えて「越知山大谷寺修理勸進状」(永正11年(1514))から『泰澄和尚伝記』編集に通じる白山(平泉寺)に対する隠された越知山の意気込みを感じていただきます。近年、一括して福井県指定文化財とされた『越知神社文書』のうち、主要な資料をまとめてご覧いただけるまたとない機会です。

平安時代には白山信仰の影響を受けたとみられる越知山ですが、中世には白山との対等性ともライバル視とも取れる言動が見られるようになります。この空気が『泰澄和尚伝記』編纂へと向かわせた原動力と考えられ、結果的に越知山・大谷寺は、越前の白山信仰の一角を担う重要な霊場となる中で独自性を主張していくこととなります。

第三章 白山中宮；平泉寺

越知山がライバル視した白山中宮・平泉寺について取り上げます。平泉寺(現白山神社)は白山へと向かう越前側の拠点(越前馬場)として君臨しました。現在も境内に残る御手洗池が『泰澄和尚伝記』にみえる「平清水」として、ここに淵源を求められますが、白山が都にまで知られるようになった平安時代には相応の規模



奥文 聖観音菩薩立像(部分)
(平泉寺辻観音堂蔵)

を持つ神社となっていたと考えられます。やがて平安時代後期には天台宗総本山の延暦寺の末寺となり、都を含めた全国への太いパイプを持つことになりました。辻観音堂安置の聖観音菩薩立像(福井県指定文化財)は、数少ないこの時期の遺品として貴重な尊

像です。平泉寺は、鎌倉時代から室町時代にかけてさらなる繁栄を遂げました。その頃の様子は国神社本白山参詣曼荼羅や平泉寺境内図で知ることができます。現在の白山神社前に広がる鬱蒼とした社叢や重厚な苔の庭に堂社が林立していたかつてのすがたに迫ります。

また、平泉寺へと至る九頭竜川沿いの回廊は、北国街道から分岐し藤島荘等を通る重要な地域でした。近年の中部縦貫道建設に伴う発掘調査により、多くの遺跡が知られるようになりました。このうち中世寺院跡として貴重な大月前山遺跡や三彩小壺を出土した三重山遺跡(ともに永平寺町)など古代以来の祈りの道として、平泉寺の歴史を考える上で切り離すことのできないの同地域についても触れます。

第四章 泰澄信仰の広がり もう1つの顔

開山・泰澄の名は白山信仰の広がりとともに知られるようになりました。これを伝えたのは霊山を渡り歩く修験者と考えられます。修験道の開祖として尊敬を集める役行者、彼の行状を絵巻にまとめた『役行者絵巻』(大阪青山学院大学蔵)に泰澄が登場しており、修験者の間ではすでに知られた存在であったことを伺わせます。これら修験者の集う霊場が拠点となり、「泰澄」はさらに広められました。ここではその一例として若狭随一の山岳霊場・青葉山中山寺を取り上げます。中山寺は馬頭観音を本尊とし、本来、国あるいは地域の平穏と安寧を祈る寺院であったと考えられます。五大明王画像、両界曼荼羅図(ともに中山寺蔵)はそのような法会を行うにふさわしいものということができるでしょう。また紺紙金泥法華経は、奈良時代には護国三部経の1つとして尊ばれた法華経を写したものです。本経巻を収納する木箱に記された「泰澄筆」が注目すべき点といえるでしょう。経巻は鎌倉時代の製作と考えられるので泰澄と時期は合いませんが、法華経と泰澄の組み合わせが重要で、法華経の行者としても認識されていたことが考えられます。

今回の展覧会では泰澄その人の実像に迫ることが目的ではなく、祖師信仰としての「泰澄」に重点を置いています。そのバイブルといえる『泰澄和尚伝記』を熟読します。さらにその中から浮かび上がる白山信仰の本流・平泉寺と、白山信仰圏内で独自の地位を主張した越知山大谷寺を対比します。さらに『泰澄和尚伝記』には描かれぬ泰澄のすがたと、泰澄信仰の広がり的一端もみてゆきます。少し視点を変えた「泰澄」をご覧ください。(河村健史)

特別展 白山開山1300年記念 泰澄 —白山信仰における意義を探る—

開催期間／平成29年10月21日(土)～11月26日(日)

観覧料／一般500円 大学・高校生340円 小中学生・70歳以上の方250円 ※20名以上の団体は2割引

「イッチョライ節」のレコード盤

〔法 量〕 縦19.0×横18.5(cm)

〔時 代〕 昭和37年（1962）

当館では、福井県内で唄われた民謡や歌謡曲などのレコード盤の収集に努めています。これまでに、「鯖江音頭」「河田音頭」や「福井小唄」「福井音頭」などを収集しています。今回紹介するのは、昭和37年(1962)に本県の「新しいふるさとの歌」となった「イッチョライ節」と「あゝ北の庄」のレコード盤です。

昭和36年7月、32年11月の起工から3年8か月の年月と総工費90億円を要した北陸線今庄・敦賀間の北陸トンネルが貫通しました。翌年のトンネル開通と北陸線の電化は、観光立県をめざす福井県にとって関西方面から多くの観光客を迎える契機として期待されました。そこで、県は観光客誘致の手段として、民謡や踊りを活用する方策を考えました。その一つとして、地元の福井新聞社・福井放送株式会社との共催で、新たに県民に親しまれ、全国的にも愛唱されるような「新しいふるさとの歌」の歌詞を公募することにしました。そして、北陸トンネルが貫通した36年7月31日、公募が開始されました。この歌の作曲者に古賀政男氏、審査員に西沢爽氏という、当時の歌謡界を代表する作詞家・作曲家を選んだこともあり、応募数は県外からのものを含め1200余りにも達しました。10月には、県総合開発室や福井新聞社など地元審査員によって、約20作品が選定され、古賀・西沢両氏に送られました。

同年12月10日に審査結果が発表されましたが、1位作品は該当なしという結果でした。そこで、主催者の県や福井新聞社は、当時のヒットソング「王将」(村田英雄)などの作詞者である西沢爽氏に依頼することにしました。そして、約3か月後の、翌37年3月18日、福井市体育館で「新しいふるさとの歌発表会」が開かれました。発表された歌は、西沢爽氏が作詞し、古賀政男氏が作曲した「イッチョライ節」と「あゝ北の庄」でした。発表会には西沢・古賀両氏が出席し、「あゝ北の庄」を歌手の島倉千代子が、「イッチョライ節」を島倉と歌手の守屋浩が歌いました。この時、体育館は2万2千人余りの観客で賑わったといえます。

さて、「イッチョライ」とは福井の方言で、「一張羅」(一枚しかない最も良い晴着)のことです。広くは「最もすばらしいもの」という意味も含んでいます。作詞した西沢氏は、「私は、ほんとうに福井らしいイキイキとした方言を探していましたが、そのときイッチョライというリズム感にあふれた言葉を見つけ出しました。私は、これだ、と思って「イッチョライ節」を書き上げました。」と語ったといえます。

では、その歌詞をみてみましょう。歌詞は4番まであり、最初の一番は「北陸トンネルネ イッチョライ」ではじまります。4番までの歌詞の中に、東尋坊や芦原温泉、白山、勝山左義長、大野、永平寺、武生の菊人形、若狭の三方五湖、蘇洞門、敦賀港など、県内各地の観光地がおりこまれ、福井のすばらしさを紹介したものとなっています。

この「イッチョライ節」は、県内各地でおこなわれる夏の盆踊りの曲として現在も受け継がれ、近年ではこの曲をアレンジしたものが、福井のヨサコイ踊りの曲として若者の間でも親しまれています。誕生から55年を経過した今もなお、県民に親しまれ、福井を代表する曲の一つといっても過言ではないでしょう。

(山形裕之)



「イッチョライ節」のレコード盤とジャケット



「イッチョライ節」の歌詞



「新しいふるさとの歌発表会」(於福井市体育館 昭和37年3月18日)

西京神戸之間鉄道開業式 諸民拝見之図

[法 量] 縦35.9×横73.0(cm)

[発 行] 明治10年(1877)

明治時代の初め頃には既に写真技術はありましたが、まだ一般的には普及はしていませんでした。

そのため、記念的行事を伝える手段として、江戸時代の浮世絵の流れを汲む錦絵が多く作られています。

本図もその1つで、日本で2番目の鉄道として明治7年(1874)に神戸・大阪間が開通した官設鉄道が、明治10年2月5日に京都まで延伸正式開業(明治9年9月5日に大宮通仮停車場まで仮開業)した時の開業式当日の様子を描いたものです。

本図を描いた絵師は、「東海道五十三次」で有名な初代広重の門人である三代目歌川広重です。三代目広重が生きた時代は文明開化の時代と重なっていたことから、彼は鉄道や蒸気船、洋風建築などの文明開化の象徴とも言える文物を多数描いており、本図もその中の1枚です。

画面の右端に描かれた煉瓦造り2階建ての建物が駅本屋です。当時の京都駅は、現在の京都駅北側にある駅前広場付近にありました。

京都開通当時は3種類の蒸気機関車を使用されていましたが、描かれた蒸気機関車が正確性に欠くため特定はできませんが、車輪配置が1Bのタンク機関車であることから、恐らく後に120形と呼ばれる機関車であったものと想定されます。120型はイギリスのRobert Stephenson社製であり、4両が輸入されまし

た。現在、その内の1両が国指定重要文化財に指定され、京都府与謝郡与謝野町の加悦SL広場において静態保存されています。機関車の側面に見られる菊の紋章は、開業式に明治天皇が乗車したので付けられたものであり、本来は付いているものではありません。

機関車の後ろには、菊の紋章を掲げた天皇陛下が乗車するお召し車両1両を含む、4両の客車が描かれています。

描かれた客車もデフォルメが大きく、実際とは随分と異なっていますが、詳細に観察すると車両の特徴をよく捉えている部分もあります。

当時の客車の全長は短く5m程度(現在は20mが主流)の小形のもので、それに伴い車輪も2軸でしたが、描かれた車両にも、その特徴はよく表現されています。また、客車の片側にデッキが付けられており、そのデッキから客室に入る貫通構造であったことがわかります。当時の客車の多くは客室内には通路が無く、側面にある4~5ヶ所のドアから、直接客室内の座席に出入りする構造となっていました。

描かれたようなデッキ付き構造の車両は、上等や中等車の極一部に見られたもので、開通式にはその車両が使用されたことが本図から読み取ることができます。

なお、お召し車両は国指定重要文化財に指定され、さいたま市の鉄道博物館で展示されています。

(水村伸行)



西京神戸之間鉄道開業式諸民拝見之図

引き札と三国警察署文書(断簡)

[法 量] 縦(最大)43×横(最大)63(cm)

[時 代] 明治～大正

襖は、表具師によって製作されます。木材で骨組をして、その後に強靱な楮紙を濃い糊で貼り…などのいくつかの工程を経て製作されます。その工程の中で反古紙が使用されることがあります。そして襖を修理する際に剥がされた反古紙の中から歴史資料が見つかることもあります。

今回紹介する資料は、福井市大丹生町の方から寄贈を受けたものです。もとは寄贈者の親戚の家にあったものでしたが、その親戚の家を解体する際、襖に貼られていた引き札を切り取り、保管していたものです。襖には多くの引き札が貼られていたようですが、そのうちの3枚だけが保管され、残されたようです。これら引き札は、三国町、東京、北海道の店のものです。東京の店のものには明治40年(1907)の暦が掲載されています。他の2枚も近い年代のものと思われます。引き札の図柄はめでたいものを意匠とすることが多く、これらも沖で漁をする恵比須大黒(写真1)、能で使われる翁面に箱(面箱か)、伊勢エビとめでたいものです。

さて、この引き札の裏側には、反古紙が貼ってありました。これは襖の製作する中で貼られたであろう反古紙の一つと思われます。その反古紙は明治30年代の三国警察署の文書です。どういう経緯を経て、この襖に使われたのかは不明ですが、この引き札が貼られた襖を製作もしくは修理した表具屋にこの文書が反古紙として渡り、使われたものと思われます。

反古紙にはどのようなことが書かれているのでしょうか。多くは出張についての報告をする復命書や雇用に関する届け出などの警察署の事務文書でした。そうした中に三国祭に関するものがありました。

今回はその三国祭に関するものを見ていきます。こ

れは、三国町の店の引き札の裏に貼られていたものです(写真2)。内容は祭りの際に飾られる、^{のぼり}幟に関するものです。

「幟建設願

(当)町櫻谷鎮座三国神本月廿日

■(五?)月十八日ヨリ廿一日迄四日間□ □

面番地ノヶ所へ幟建設仕度候

御許容成

明治三十壹年五月十七(八を上から七に訂正)日

三国神社氏子総代

(後略)」

上下が破れているので、読めない部分もありますが、三国祭で幟を立てる際の届出とわかります。5月19日～21日が祭りの日とされるので、その前々日から幟を立てていたものと思われます。

三国祭に関するものがもう1点あります。文書の前半となる部分が無いので、どういう目的で書かれたのかは不明です。ただ、山車の表題と大きさが書かれています。この山車の表題を別の記録と照合するといつのものかがわかります。先の「幟建設願」と同様、明治31年のものでした。

今回紹介した資料は、「歴史を変える」というような大きな発見とは言えませんが、当時の三国祭の様子の一端がわかる資料です。

襖に貼られているものすべてがそういうものとは限りませんが、もし、処分や修理することがありましたら、気を付けてみてください。もしかしたら、大きな発見があるかもしれません。

(川波久志)



写真1 引き札「四十物肥料商 船前問屋 委託販売業 越前三国港堅町 山田忠太郎」

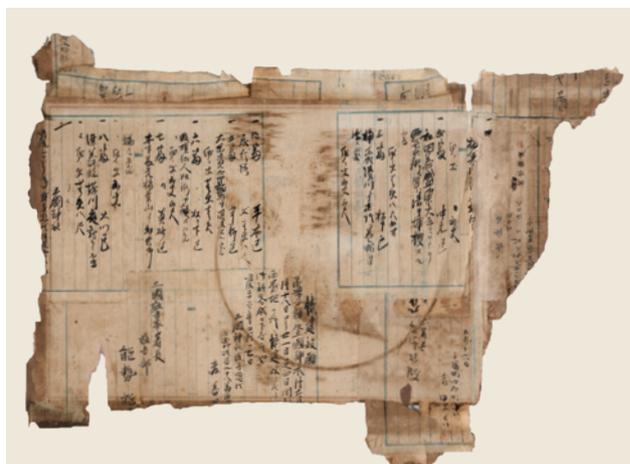


写真2 三国警察署文書(断簡)

「水族館雙六」を読む

はじめに 「絵すごろく」について

当館では、平成27年度にミニ企画展「すごろく 冬の楽しみ」(平成27年12月19日～28年2月26日)を開催し、46点の絵すごろくを展示しました。絵すごろくは、サイコロを振って出た目によってコマを進め、上がりをめざす遊戯です。その歴史は古く、江戸時代にはさかんに作られており、長く室内遊戯のひとつとして親しまれました。

絵すごろくの発行目的やテーマはさまざまです。たとえば、江戸時代には道中ものや名所案内のすごろくが流行し、明治期には文明開化や新体制をテーマとしたものが見られます(『日本帝国国会雙六』『立身出世雙六』など)。明治時代後半になると、子ども向け雑誌の付録としても人気となり、太閤記や鬼退治などの物語や、スポーツの紹介、世界や日本の地理解説、災害や戦争などのテーマで作られました。また、江戸時代後期から多色摺りが用いられたため色彩豊かで美しく、かつ、スタートとゴールが一見して明らかであることも特徴です。つまり、「絵すごろく」には、発信側としては難しい内容をビジュアルのインパクトと筋道を両立させて掲載でき、受け手は、ゲームを楽しみながら複雑な情報を吸収できるという利点があるといえます。

「水族館雙六」

さて、そうした絵すごろくのなかから、今回は「水族館雙六」について見ていきたいと思えます。この雙六は、枠外の記載によれば、明治32年(1899)12月に発行され、絵師の渡邊忠久が作画と発行人を兼ねています。右下の振出し「魚類蓄養場」から中央の上がりを目指します。形式は、サイコロを振って出た目の数だけコマを進める「廻りすごろく」ではなく、それぞれのマスにサイコロの目に応じたコマの動きが指示されている「飛びすごろく」です。

この雙六は、その発行年代から、東京の浅草公園に明治32年11月に開館した「浅草公園水族館」に関わるものと推測されます。描かれている水族のラインナップも、『東京名物浅草公園水族館案内』(明治32年発行)記載の展示内容と「らっこ」

以外は一致します。水族以外のマスでも、上がりの「貴紳(身分が高く、名声のある人物)臨観」(写真5)は、同年11月11日に浅草公園水族館を観覧した小松宮彰仁親王(当時の全国水産会会頭)を、「観音」(写真4)は、水族館が所在する「浅草公園」が、聖観世音菩薩像を本尊とする浅草寺の旧境内に所在することを示すと考えられます。

描かれている内容を詳しく読んでみましょう。振出しは前述の「魚類蓄養場」で、以降、「えび」「めばる」「たいまい」「入口」「らっこ」「保健槽」「魚類運搬」「でんきうを」「ごんずい」「観音」「さめ」「ふぐ」「あかえひ」「かに」「たい」とあり、上がりが「貴紳臨観」で、計17のマスで構成されています。

こうして並べると、新しく開館した水族館を紹介するには不思議なマスがあることに気が付きます。上記の17マスのうち、振出しの「魚類蓄養場」(写真1)のほか、「保健槽(収集した生物の健康状態を整えるために一時的に飼育する水槽)」(写真2)、「魚類運搬」(写真3)、「貴紳臨観」の4つのコマです。これらは、観覧者の目にはふつうは触れることのない一面、いわば水族館の「舞台裏」を記載しているのです。

日本の水族館の歴史

なぜ、こうしたマスが設定されたのか。その点を考える前に、まず、この雙六が発行された明治32年当時の水族館の状況について振り返ってみましょう。じつは、



「水族館雙六」明治32年(1899)発行 縦52.3×横73.6 (cm)

明治30年代、日本国内に水族館はまだ多くはありませんでした。国内の水族館は、明治15年(1882)に設置された東京の上野動物園の付属で「観魚室(うをのぞき)」と呼ばれた淡水魚の水族館に始まり、その後、民営の浅草水族館、研究を主目的とする東京大学理学部附属三崎臨海実験所附属水族館と、設置目的の異なる水族館が開かれました。並行して、水産博覧会の開催に伴って期間限定の展示施設としての水族館が設けられ、博覧会の人気ともあいまってその存在と楽しさが知られていきました。

「水族館」の舞台裏

では、なぜ、この「水族館雙六」は「舞台裏」を記載したのでしょうか。

浅草公園水族館の開館以前、国内の先進的な水族館といえば、明治30年に第二回水産博覧会の附属施設として神戸市の遊園地・和楽園内に置かれた通称「和田岬水族館」でした。和田岬水族館は、日本の動物学の権威・飯島魁の設計・主導により、海水・淡水の貯水池、濾過と送水の仕組みや保健槽を備え、水族の採集スタッフと船も確保した近代的な水族館でした。展示の充実ぶりからも多数の来館者を集めました。博覧会終了後、いったん閉館します(後に湊川神社境内に移転・開館)。そして、その成果を受けて、首都・東京の浅草公園内に常設館として計画されたのが、「浅草公園水族館」です。運営会社として株式会社水族館が立ち上げられた私設水族館でもありました。和田岬水族館と同様に飯島魁の設計・指導を受け、海水貯水池(地下)、濾過・循環施設を備え、魚類蓄養場や採集・運搬船を確保し、本格的な水族館を目指したのです。

それまで、多くは博覧会附属・期間限定で運営されていた水族館を、営利目的・単体・常設で運営するには、水族館そのものの価値について理解を得る必要があります。とはいうものの、当時、水族館が単に珍しい魚を見物するための施設ではなく、教育的・学術的な意義を持つことは、あまり認識されてはいませんでした。展示する魚など水族をどのように集め、運び、展示しているのか、そのためにはどのような技術や施設、人員が必要なのか、という事情についても同様です。そうしたなかで作られたと考えると、この「水族館雙六」は子ども用の玩具というよりは、むしろ、水族館の舞台裏の作業を加味することで、改めて水族館の社会的な価値をアピールし、広く理解を求めるプレゼンテーション資料のように思えるのです。掲載されている水族には、縁起のいいもの(たい、えび、たいまい)、珍しいもの(でんきうを、あかえび)が配され、ほかにも所在地への崇敬を示すコマ(観音)や、皇室の権威を感じられる上がり(貴紳臨観)など、各方面への配慮も感じられます。

まとめ

「水族館雙六」は、「絵すごろく」という媒体の利点、情報の「ビジュアル化」「一望化」「ストーリー化」などをうまく利用し、「水族館」そのものに理解を深めてもらうために作られたのではないのでしょうか。明治後期、いまだ目新しいものであった水族館の本質と価値をいかに理解してもらい、支持を得るか。その工夫が「絵すごろく」の採用だったと考えると、現在の私たちもそうした工夫に学びつつ、努力を重ねる必要を感じるのです。(瓜生由起)



写真1「魚類蓄養場」



写真2「保健槽」



写真3「魚類運搬」



写真4「観音」



写真5「貴紳臨観」

4月

- 6日(木)
国立歴史民俗博物館、韓国国立民俗博物館来館(資料調査)
- 13日(木)
福井県ふるさと文学館来館(資料調査)
- 16日(日)
「春爛ける頃の茶会」(エントランスロビー)
- 18日(火)
京都国立博物館来館(資料返却・貸出)
- 22日(土)～6月4日(日)
企画展「福井の私鉄」(企画展示室)
- 24日(月)～6月20日(火)
写真展「昭和の子どもたち」(エントランスギャラリー)
- 25日(火)
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館来館(資料貸出)
- 29日(祝・土)
移動講座「京福電鉄廃線跡とえちぜん鉄道車両基地」

5月

- 14日(日)
企画展「福井の私鉄」展示説明会(特別展示室)
福井県文書館来館(資料貸出)
- 17日(水)
愛知県立陶磁美術館来館(資料調査)
- 20日(土)
ふくい歴博講座「福井の私鉄」(研修室)
- 25日(木)
東海歴史研究会来館(視察)
- 28日(日)
企画展「福井の私鉄」展示説明会(特別展示室)

6月

- 6日(火)～7日(水)
北信越博物館協議会総会・研究協議会(敦賀市プラザ萬象)
- 21日(水)
岐阜市歴史博物館(資料貸出)
- 21日(水)～30日(金)
燻蒸休館



体験会「薬研を使ってみよう!」(8月6日)

7月

- 1日(土)～8月31日(木)
写真展「まつりのなかの子どもたち」
(エントランスギャラリー)
- 5日(水)
勝山市教育委員会来館(資料貸出)
- 21日(金)～8月27日(日)
特別展「越前若狭の医学史ーふくいの医人たちー」
(特別展示室)
- 22日(土)
講演会「ふくいの医人と現代医療」(講堂)
- 28日(金)
熊本県立美術館来館(資料調査)
- 30日(日)
特別展「越前若狭の医学史ーふくいの医人たちー」
展示説明会(特別展示室)

8月

- 2日(水)～7日(月)
博物館実習(会議室ほか)
- 2日(水)
あわら市教育委員会来館(資料貸出)
- 5日(土)
ふくい歴博講座「赤本の人・築田多吉」(研修室)
- 6日(日)
キッズミュージアム「しょうのう船を作って遊ぼう!」
(正面玄関)
体験会「薬研を使ってみよう!」(エントランスロビー)
- 8日(火)
福井市中学校社会科授業研究委員会来館(会議室・特別展)
- 10日(木)
橘曙覧記念館来館(資料調査)
- 12日(土)
特別展「越前若狭の医学史ーふくいの医人たちー」
展示説明会(特別展示室)
- 16日(水)
花園大学来館(医学史展調査)
- 18日(金)
福井県立藤島高等学校来館(資料撮影)
- 20日(日)
喫茶養生の茶会(エントランスロビー)
- 24日(木)
尾道市史編纂室来館(資料調査)
- 28日(月)
島根大学来館(資料調査)